

ドイツ文学わき道散歩(17)

「雪ぐ」という言葉がある。「ゆき」ではなく「すす(ぐ)」と読み、洗い流すという意味である。「雪辱」は読み下すと「辱(はじ)を雪(すす)ぐ」。外国語への訳語を調べると「リベンジ」が挙げられるが、それは元来「復讐」を表す言葉でニュアンスが違う。「雪辱」以外にも、訳出に戸惑うほど日本語には「恥」に関する言葉が多く存在する。日本人がシャイだと言われるのは、恥に対する概念の根付き方にも理由があるのではなかろうか。

ベルンハルト・シュリンク作『朗読者』は、恥とは何かと考えさせられた作品である。親子ほど歳の離れた男女の恋の話として始まり、少年の見たもの、感じたものがそのままの目線で語られる前半では物語の核がヴェールに包まれている。二人の恋愛が進むにつれ、読者にはちょっとした違和感が生じる。ヒロイン・ハンナの行動がしっくり来ないのである。ミヒャエル少年にも読者にも解らないハンナの言動。しかし、ある箇所からその違和感こそが物語の伏線だったと気付かされた時、読者はぐいぐいとこの小説に引き込まれていくはずである。事実のひとつひとつが、散りばめられた「違和感」という点と点とを結ぶ線となって現れる。たちこめた霧の先にあった真実は、戦後ドイツの姿であった。

著者シュリンクは1944年生まれで、戦後の葛藤のなか育った世代と言える。本業は法律家である。『ゼルプの欺瞞』でドイツ・ミステリ大賞を受賞した。始まりがミステリ小説ということで「ミステリ作家」と呼ばれていたシュリンクは、『朗読者』の世界的ベストセラーにより小説家として新たな一歩を踏み出したが、そもそも作家としてミステリを入りに選んだ理由は「論文を書くのと似ているから」というから、『朗読者』の巧妙さにも頷ける。違和感は強すぎれば拒否反応を呼び、弱すぎれば通り過ぎられてしまう。シュリンクの計算された違和感は少しずつ積み、積みきったところ一気に謎解きが訪れる。この次々と鍵が開けられていくスッキリ感と軽妙な筆致が、時間を忘れ読み耽ることのできる読み易さを生み、ベストセラーを手助けした。読み終えた時は切ない、やるせない気持ちになるが、不思議と不快感はない。胸が震えるという表現がよく似合う小説である。一度目と二度目では読後の印象も少し異なるため、是非時間を置いて再読されることをお勧めしたい。

聞くは一時の恥、聞かぬは一生の恥。しかし、こうも言う。言うは易く、行うは難し。ハンナの「あなただったら何をしましたか」という問いに読者の心はさざめくであろう。読者がその言葉を反芻すればするほど、物語の余韻は続くのだから。日本での裁判員制度が始まれば、他人事ではなくなる。

ところで、『朗読者』がベストセラーになったのは1990年代後半のことであるが、その10年ほど前にやはりドイツ国内のみならず、国外とりわけフランスで読まれた小説がある。フランス語で「蛙」という意味を持つ名の主人公が、というより主人公の嗅覚が、引き起こす異様な物語については、また別のお話。